

杉
明
朝
体

杉本幸治制作
硬筆風細明朝

Digital Typefaces for
Professionals

*OpenType for the Macintosh
and the Windows*

タイポデザインアーツ
朗文堂

偉哉日域地球之中精銳干鍾
陽氣以充垂統一胤宵壤溪窮
君臣分定兆鹿協同令簡律少
戸足家豊真率為習敦厚成風
否泰更運体格汚隆陟忠點佞
捨私先公宏規懿範嘉謨体烈
信賞必罰勇断果決揆乱反正
挙滅繼絶舒滞奮掩拯奨補欠

『新撰千字文』池原香釋撰并書より部分

おこそとのほもよろをだば
オコソトノホモヨロヲダバ

杉明朝体／12級ベタ組み／行送り22番

二〇〇〇年の頃であったと記憶している。昔の三省堂明朝体が懐かしくなくて、何とかこれを蘇らせることができないうかと思うようになった。ちょうど「本明朝ファミリー」の制作と若干の補整などの作業は一段落していた。しかしながら、そのよりどころとなる三省堂明朝体の資料としては、原図は先の大戦で消失して、まったく皆無の状態であった。わずかな資料は、戦前の三省堂版の教科書や印刷物などであったが、それらは全字種を網羅しているわけではない。したがって当時のパターン原版や、活字母型を彫刻する際に、実際に観察していた私の記憶にかろうじて留めているのに過ぎなかった。

戦前の三省堂明朝体は、世上から注目されていた「ベントン活字母型彫刻機」による最新鋭の活字母型制作法として高い評価を得ていた。この技法は精密な機械彫刻であったから、母型の深さ、即ち活字の高低差が揃っていて印刷ムラが無かった。加えて文字の画線部の字配りには均整がとれていて、電胎母型の明朝体とは比較にならない。しかしながら、戦後になって活字母型や活字書体の話題が取り上げられるようになる。「三省堂明朝はベントンで彫られた書体だから、幾何学的で堅い表情をしている」

想が湧いた。ちなみに既存の細明朝体を見ると、確かに横線は細いが、その横線やはらいの始筆や終筆部に切れ字の現象があり、文字画線としては不明瞭な形象が多く、不安定さもあることに気づいた。そのような観点を踏まえて、全く新規の書体開発に取り組んだのが約10年前「杉本幸治の硬筆風極細新明朝」即ち今回の「杉明朝体」という書体が誕生する結果となった。ひら仮名とカタ仮名の「両仮名」については、敢えて漢字と同じような硬筆風にはしなかった。仮名文字の形象は流麗な日本独自の歴史を背景としている。したがって無理に漢字とあわせて硬筆調にすると可読性に劣る結果を招く。既存の一般的な明朝体でも、仮名については毛筆調を採用するのと同様に、「杉明朝体」でも仮名の書風は軟調な雰囲気として、漢字と仮名のバランスに配慮した。「杉明朝体」は極細明朝体の制作コンセプトをベースとして設計したところに主眼がある。したがって太さのウェートによるファミリー化の必要性は無いものとしている。一般的な風潮ではファミリー化を求めるが、太い書体の「勘亭流・寄席文字・相撲文字」には細いファミリーを持たないのと同様に考えている。「杉明朝体」には多様な用途が考えられる。例えば金融市場の約款や、アクセントが無くて判別性に劣る細ゴシック体に代わる用途があるだろう。また、思いきって大きく使ってみたら、意外な紙面効果も期待できそうだ。

杉明朝体／14級ベタ組み／行送り24番

わたしが修行した三省堂では、教科書や辞典など、大量の文字物印刷に備えた活字をつくっていました。大量生産に備えることとは技術に支えられることです。そこには設計や製図という、技術者としての基本概念がありますし、実験と検証をかさね、数値的な追求と比較や、字体にたいする整合性といった、技術者としての能力を問われます。技術者としては当然のことですが、平行定規・カラスロ・雲形定規などの精巧な製図用具を選んで、それを駆使しました。また版下用紙や墨はもとより、製図用具にはこだわりがありました。市販のものでは足りず、雲形定規などは木製の良いものを探して、好みのカーブや形状を紙ヤスリなどでつくり直しました。いまではすっかりパソコンに慣れましたが、この気に入った雲形定規の三枚だけは手ばなせないですね。体でおぼえているというか、カーブなどはパソコンを使っている、ときどきこの雲形定規を見て、触って、再確認しています。



紙ヤスリなどで精密に手直された木製の雲形定規

杉明朝体／14級ベタ組み／行送り24番

とか、「理科学系の書籍向きで、文学的な書籍には向かない」とする評価もあった。確かに三省堂明朝体は堅くて鋭利な印象を与えていた。しかし、それはベントンで彫られたからではなく、昭和初期の文字設計者、桑田福太郎と、その助手となった松橋勝二の発想と手法に基づく原図設計図によるものであったことはいうまでもない。

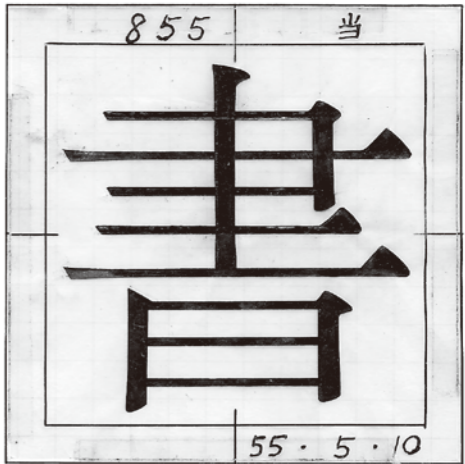
世評の一部には厳しいものもあったが、私は他社の書体と比べて、三省堂明朝体の文字の骨格、すなわち字配りや太さのパランスが優れていて、格調のある書体が好きだった。そんなこともあって、将来何らかの形でこの愛着を活用できればよいがという構想を温めていた。三省堂在職時代の晩期に、別なテーマで、辞書組版と和欧混植における明朝活字の書体を様々な角度から考察した時、三省堂明朝でも太いし字面もやや大きすぎる、いうなれば、三省堂明朝の堅い表情、即ち硬筆調の雰囲気を活かかし、縦横の画線の比率差を少なくした「極細明朝体」を作る構

杉明朝体／8級ベタ組み／行送り14番

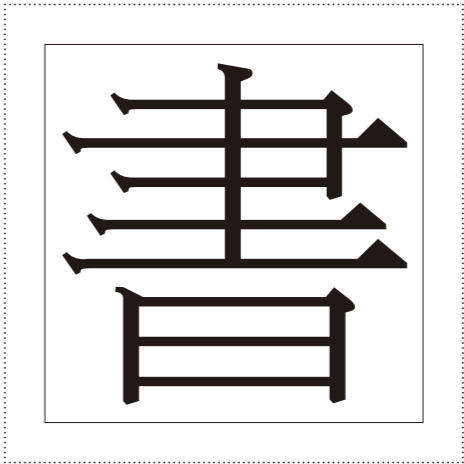
二つの「書」の図版を掲げた。かたや一九五五年、杉本幸治二八歳の春秋に書んだ時期のもの。こなたは「杉明朝体」である。二〇〇三年、骨格の強固な明朝体の設計を意図して試作を重ねた。青春期を過ごした三省堂における辞書に用いられるような本用本格書体制作が狙いであった。また現代の多様化した印刷紙と印刷方式を勘案しながら、誌面を明るくし、判別性を優先し、可読性を確保しようとする困難な途への挑戦となった。制作に着手してからも字体の混乱に苦慮しながらの作業となった。名づけて「杉明朝体」の誕生である。制作期間は六年に及び、厳格な字体検証を重ね、ここに豊富な字種を完成させた。疲動ながらも力感に富んだ画線が、縦横に文字間に閃光を放ち、爽風が吹き抜けるような明るい紙面には、濃い緑の若葉をつけた杉の若木が整然と林立し、ときとして大樹のごとき巨木が重いことを表徴に受けとめる。

杉明朝体／7級ベタ組み／行送り12番

株式会社三省堂と三省堂印刷株式会社／田藤臣の亀井忠一によって1881年（明治14）古書店として創業し、出版事業には1884年（明治17）に進出した。しばしば三省堂書店と混同されるが、出版・印刷部門はふるく1915年（大正4）に株式会社三省堂として法人化されている。また1974年（昭和49）の経営苦境を機として創業者一族は三省堂書店の経営だけになっている。三省堂はおもに辞典・事典・教科書・学習参考書の印刷・出版社として著名で、『廣辭林』『明解国語辞典』『コンサイス辞典シリーズ』『クラウン辞典シリーズ』などで知られる。三省堂は昭和50年代後半から東京都千代田区三崎町に本社を設置。印刷製造部門は、三鷹工場から八王子工場に移転し、1981年（昭和56）三省堂から独立して三省堂印刷株式会社となった。



児文堂が和文活字用の母型制作に初めて取り組んだ児文堂明朝の原字（一九五五年杉本幸治設計、原寸／協力・リョービイマックス）



児文堂明朝の原字と同サイズの杉明朝体。

杉明朝体はね、構想を得てから随分考え悩みましたよ。その間に土台がすっかり固まったのかな。

設計がはじまってからは、揺らぎは一切無かった。

構造と構成がすっかりしているから、

小さく使っても、思い切り大きく使っても

酷使に耐える強靱さを杉明朝はもっているはずですよ。

若い人に大胆に使ってほしいなあ。

杉本幸治 八十三歳の述懐

杉明朝体 / 20級ベタ組み / 行送り32番



二〇〇〇年の頃であったと記憶している。昔の三省堂明朝体が懐かしくなって、何とかこれを蘇らせることができないうらみかと思うようになった。

和欧混植における明朝活字の書体を様々な角度から考察した時、三省堂明朝でも太いし字面もやや大きすぎる、いうなれば、三省堂明朝の堅い表情、即ち硬筆調の雰囲気を活かし、縦横の画線の比率差を少なくした「極細明朝体」を作る構想が湧いた。ちなみに既存の細明朝体を見ると、確かに横線は細いが、その横線やはらいの始筆や終筆部に切れ字の現象があり、文字画線としては不明瞭な形象が多く、不安定さもあることに気づいた。そのような観点を踏まえて、全く新規の書体開発に取り組んだのが約一〇年前「杉本幸治の硬筆風極細新明朝」即ち今回の「杉明朝体」という書体が誕生する結果となった。

ひら仮名とカタ仮名の「両仮名」については、敢えて漢字と同じような硬筆風にはしなかった。仮名文字の形象は流麗な日本独自の歴史を背景としている。したがって無理に漢字とあわせて硬筆調にすると可読性に劣る結果を招く。既存の一般的な明朝体でも、仮名については毛筆調を採用するのと同様に、「杉明朝体」でも仮名の書風は軟調な秀麗な雰囲気として、漢字と仮名のバランスに配慮した。

1927年(昭和2)4月東京都台東区下谷うまれ。終戦直後1946年(昭和21)印刷・出版企業の株式会社三省堂入社。本文用明朝体、ゴシック体、辞書用の特殊書体などの設計開発と、ベントン機械式活字母型彫刻システムの管理に従事し、書体研究室、技術課長代理、植字製版課長を歴任。またその間、晃文堂(現・株式会社リョービイマジクス)の明朝体、ゴシック体の開発に際して援助を重ねた。「本明朝体」の制作を本格的に開始し、以来30数年余にわたって「本明朝ファミリー」の開発と監修に従事した。そしてこの度「杉明朝体」を開発した。「タイポデザインアーツ」主宰。

杉明朝体 / 10級ベタ組み / 行送り15番

『杉明朝体』の書体設計は杉本幸治氏(タイポデザインアーツ)によるものです。

- ・日本語OpenTypeフォントStd仕様。MacintoshとWindowsでのご利用が可能です。
- ・PDFファイルにエンベット(埋め込み)可能、アウトライン化可能です。
- ・OpenTypeフォントStd仕様ですが、非漢字(仮名、英数字、記号など)は1221文字のみの収容となっています。
- ・Adobe InDesign、Adobe Illustratorのプロポーショナル・メトリクス機能には対応しておりません。
- ・カーニング(オプティカル)機能をご利用ください。
- ・OpenTypeフォントに対応していないアプリケーション(バージョン)では、正常に表示できない場合があります。

このOpenTypeフォントが使える動作環境は次のとおりです。

[Macintoshの場合]

Mac OS X 10.1以降 : 利用可能です。

Mac OS 8.1-9.x : ATM (Adobe Type Manager) 4.6以降が必要です。

その他のMac OS : ご利用いただけません。

[Windowsの場合]

Windows 2000、XP、Vista、7 : 利用可能です。

Windows 95、98、Me、NT4.0 : ATM (Adobe Type Manager) 4.1以降が必要です。

Digital Typefaces for Professionals

OpenType for the Macintosh and the Windows

杉明朝体

パッケージ内容 : CD-ROM 1枚、ソフトウェア製品仕様許諾書

特約販売店

朗文堂タイプコスミック
160-0022 新宿区新宿 2-4-9
TELEPHONE: 03-3352-5070
FACSIMILE: 03-3352-5160
www.ops.dti.ne.jp/~robundo